
神獣のトビラ

Jumper

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神獣のトビラ

【コード】

N2091Z

【作者名】

Jumper

【あらすじ】

『神獣のトビラ』。神獣揃いし時、新たな次元を求め トビラは開く.....。

少年コートの元に、『神獣』シャイトは突然現れた。

自分の出生の秘密を知ったコートは、忍び寄る魔の手から世界を護るため、

神獣探しの旅に出る。

トビラがいつか開くとき、その先には何が待つのか.....

プロローグ 神獣のトビラ

人間界に伝わる伝説の一部。

『世界のでっぺんにトビラがあった。

世界を創りし「神獣」達のトビラ。
彼らなくしては決して開かぬトビラ。

トビラは世界が終わるときに開く。
新たな「次元」を求めて開く。

世界が壊れかけたとき、神獣は勇者を従え、
トビラを開き、次元を開くだろう……。

この物語は、そんな「神獣のトビラ」と「神獣」、
そして世界の危機に巻き込まれた少年コートの、
厳しくも楽しい、長い冒険のお話

プロローグ 神獣のトビラ（後書き）

作者の妄想の産物。

文章力が至らなさをすぎると思いますが何卒宜しくお願いします。

第1話 ドラゴン、現る！（前書き）

第1話。

第1話 ドラゴン、現る！

夏。太陽がギンギンが照りつけている。

ここは「ラムルド大陸」の小さな町、「ロット」。

鉱石の産地として名高く、今日もピツケルを担いだ男達が町を歩き交う。

町の中心部に巨大な鉱山。囲むように市場と住宅街がある。

鉱山から北へは鉱物輸送用の道が開けている。

少年コート。

彼もまたこの住人の一人であった。

先月15の誕生日を迎えたが、相変わらず彼女もおらず、叔父の仕事を手伝う毎日。

3年前に母を亡くし、父は物心ついたところから行方が分かっていない。

母が亡くなったタイミングで、叔父の家へやって来た。

叔父は「よせ」といつているが、コートは叔父の仕事を一生懸命手伝っている。

採掘された鉱石を運び出す仕事だ。

結構肉体労働で、15の彼にとって、夏の日この仕事は拷問に近い。

「飯にしよう！ー！！」

彼の叔父の声が響き、

「イーリヤッホウ！」

ピツケルや台車を投げ捨てた男達が一斉に走り出した。

「オレも食おう・・・」

コートも台車をおき、鉱山を後にした。

「ウヒー！旨そうなナメクジ飯！」

「・・・相変わらず『変』食だね」

「いやいや、旨いぞナ飯」

今ではお互い敬語を止めて話している。

今彼の叔父が手にしているのは、彼の好物のナメクジ飯、略してナ飯だ。

平気で食べられるとかではなく、本当に好物だと彼は語っている。

「さて、味付けに塩を」

「ええ！？ナメクジだぞ！？溶けるよ！」

「チーズ感覚で食べるぞ！」

親指を立て、ウインクするコートの父、「レイン」。

コートははあ、とため息をついた後、用を足しにトイレへ向かった。

鉾山に隣接する加工工場内に、鉾山職員用のトイレがある。

用を足し、工場を跡にしようとしたときだ。

ドアに手をかけた瞬間、コートはふと気配を感じた。

「・・・？」

勘違いだろうか？そう思いドアを開けようとするがやはり気になる。

「誰だ・・・」

そつと後ろを振り返った。

ブン、と何かが空気を切る音がした。

「何だ！？誰だ！」

ドアを少し開け、逃げられる体勢を作り、警戒する。

「まーまーそんなあわてないですよ」

緊張感のない間抜けた声が聞こえた。
子供の声。

「・・・子供？」

コートは辺りを見回すが、人などそこにいなかった。
ドア付近は普段、工場の職員のたまり場になっているだけ。
そこを定位置としている人間は居ないはず。

「姿を見せてくれよ・・・」

おそろおそろコートは聞いた。

すると直後、彼の前で何かが光り、横切った。

「おわっ!?!?人魂!?!」

「ちげーよ」

いつの間にか光は彼の前で止まっていた。

やがて声の主である光の輝きが落ちてきて、姿が露わになる。

「・・・え？」

これ、ドラゴン? コートはそう思った。

丸くて大きな瞳。頭の後ろから尾にかけては何本か触手のようなものが伸びている。

手は幼児の手のように小さく、犬のそれに近いような爪が3本。

また、背中には小さな羽が。

「よう! 驚いた!?!」

「驚かないわけないだろっ!?!」

「結論から言おう。オレはドラゴンでお前を迎えに来た。さあ行く準備はいいか3 - 2 - 1・・・」

「ちよつ・・・待・・・て!」

もの凄い早口で言うドラゴンにコートは詰まった声で言った。

「まずお前は何なんだ!」

「シャイト。」

「いや名前じゃなく」

「じゃあ何だ?」

「えと・・・何だ?種類?」

人類以外と話すのは当たり前のように初めてだったコートは言葉を上手く選べない。

「種類・・・?んー・・・『神獣』、になるのか?」

「・・・神獣?」

コートは耳を疑った。

トイレから出てきて帰ろうと思ったたら突如出てきたちっちゃい竜を神と信じる方が無理だった。

「あ、ああ、珍獣ね。なるへそ。」

「違う!神に獣で『神獣』!」

シャイトと名乗るドラゴンは半分キレ気味で言った。

「・・・」

本当かどうかは分からないが、取り敢えず認めないと先に進めない。なのでコートは話を合わせることにした。

「で、神獣サマがオレに何の用ですまする?」

わざとらしく敬語を使うコート。すると急にシャイトは真剣な表情になった。

「言っても信じてもらえないと思うけど、今『神界』があぶないんだよ」

シャイトは言葉を続ける。

「今から言うことを真実と信じ、誰にも言わないと約束してくれる?」

「言いふらしはしない。内容によるな、信じるかは。あと神界の危機とオレの関連性詳しく」

「・・・言いふらさないなら良かった。関連性についても話す・・・」

「安堵の表情を浮かべるシャイト。」

目を瞑り、大きく息をはいた後、シャイトは口を開いた。

第2話 神界

「まずは神界について話すよ……。神界とは、この世界の遙か上空にある……。」

「そう言えばそんなおとぎ話を聞いたことがある。」
思い出しながらコートが言った。

「神界は『役目を終えた神々』が、次の役目が来るまでに過ごす場所なんだ。」

「役目？」

「生物にはそれぞれ個々の役目が存在するんだ……。」
話を続けるシャイト。

「神界は、2000年前までは活動していたんだ。だけど2000年前、突如神界に襲撃……。！」

震える声で力強くシャイトは言った。

「命を取られたもの、ケガで記憶をなくした者などもいた。」

コートは不思議そうに聞いた。

「何でお前は無事なんだ？」

その問いに、シャイトは力無く、

「それでオレの父親はやられた……。子供だったオレをかばってね。」

「。」

「。。。」

コートにはかける言葉が見つからなかった。

「オレの他にも生き残りはいる。そしてそんな奴らに犯人グループを聞くと必ずこう言う。」

「。。。『たった一人だ』と。。。。。」

コートの顔が青ざめた。

もしこれが本当だとしたら大変な事だ。

「神」と呼ばれる者をたった一人で滅ぼした者が居るといえるのか。

彼の冷や汗が止まらない。
そんな異常な事態に巻き込まれたら・・・
不安が頭をよぎる。

「なあ、オレを呼び止めた理由を話してくれ・・・」
青ざめた表情で聞いた。

「神界までついてきてくれれば話は早い」

「何故だよ！？そんな危険な場所に　　っ」

「今は大丈夫だ！襲撃に備えて常に魔力で防御膜を展開している・・・」

コートの言葉を遮ってシャイトは言った。

「これで人生終わったらお前のせいだ・・・」

覚悟を決めたコートはシャイトに言った。

（嘘にしては出来すぎだ。本当だとして、こんな事に人間を巻き込むなんて普通あり得ない。）

（オレに何かあるのだろう。）

「ありがとう。恩に切る」

シャイトはニツと笑った。

数秒後、彼らの周りを紫色の光が包む。

「何だ!?!」

焦るコートにシャイトは言った。

「長が誘っている。味方だ。心配要らない」

光はやがて大きくなり、その後、二人ごと消えてしまった。

「何だよここは・・・」

夢でも見ているのか、とコートは錯覚した。

光に誘われ、やって来たのは神界だった。

「奥に長が居る。彼を交えて話をしなければ・・・」

シャイトに言われるがまま、コートは奥へ奥へ進んでいった。

地面はない。透明な空間にコートは立っていた。

何も無いところに木が、池が、家がたっている。

空に雲はない。ただただ青空が広がっている。

雲は正確にはないわけではなく、透明な床の下に見えていた。

「さ、この中だ」

来たときから見えていたひとときわ大きな建物にコート達は入っている。

奥へ進むと、玉座に人が座っていた。

人間である。長くてふわふわしているような髭を生やし、足と腕を組んで座っている、大柄なおじいさん。

「よく来てくれた・・・」

「はあ・・・」

コートは反応に困った。

が、すぐに話を始めた。

「あのっ・・・オレ、ここに呼ばれたんだけど・・・ですけど・・・」

敬語がよいのかため口でよいのか戸惑うコート。

「うむ。シャイトに君を呼ぶよう言ったのは儂じゃ」

「そうなんだよ・・・」

シャイトはコートに向かって言った。

「君、名は」

コートは長に聞かれた。

(そう言えばシャイトにも名乗ってなかったな・・・)

「コート・・・」

「父の名はダウンか」

そう問われる。

「何故知っているのですか・・・」

父の顔は覚えていないが、叔父から話は聞いている。名前は間違いなく「ダウン」。

コートの質問を無視し、長は歓喜の声を上げた。

「見つ・・・けた！大儀であったシャイトよ！」

「光栄に預かります」

ぺこっと頭を下げたシャイト。

「どういう事でしょうか・・・」

訳が分からないコートが問う。

長は咳払いをしてから言った。

「君はある一族の末裔であるのだ。」

「・・・？」

「『ネイチエスト：神獣族』、君はその一族の最後の生き残りだ・・・」

第2話 神界（後書き）

二話終了です。

コートの人格が私自身上手くつかめていない現状・・・

第3話 決心

「・・・は？」

コートは何が何だか分からないと言つような顔で聞き返した。

「何だその『神獣族』って・・・」

コートは言葉を続けた。

「人間の部族の名じゃ。昔は君以外にもたくさんおつた。」

長は答える。

「君の父の名がダウンというならば間違いは無い。」

「その通りじゃ」

シャイトと長が言った。

「一体それは何なんだ？オレが此処に呼ばれた理由と関係が・・・」

「大アリじゃ」

話し終える前に長が口を挟んだ。

長は話し始めた。

「『神獣族』とは特殊な人間のことを指す。神獣達と特殊な関係にある人間達だ。」

神獣が心を許す唯一の人間であつた。

そして彼らもまた、偶然200年前天界に集まっていた・・・

その時に殆どの神獣族は滅んでしまったのじゃ・・・」

「んで残つたのが親父とオレ・・・」

納得したようにコートが呟き、うむと答える長。

「神獣と彼らの間に何故そのような信頼関係があるのか・・・。」

今の神獣達も、儂も生命の始まりから居たわけではない。

我々の前にも神界の住人、勿論神獣達も居た訳で、先代の事を詳しくは分からない・・・」

長は短く咳払いをし、

「そこで本題じゃ」

そう言った。

「再び神界及び『世界』そのものが危機に直面している。」

「え・・・」「な・・・」

コートは勿論、シャイトまでも驚きの声を漏らした。

「儂は感じる・・・悪しき意志を・・・」

200年前・・・あの直前に感じたのと同じ意志を・・・」

「な!？」

シャイトが突然驚く。

「じゃあ200年前此処を襲った奴が再びっ!？」

取り乱したように言うシャイトに落ちつくよう言った長は続けた。

「恐らくそうであろう・・・そこで君に頼みたい」

長はコートに指を指した。

「一体何を・・・?」

「先代から受け継がれている話がある。

神獣族は神獣の力を開放する力があるそうじゃ・・・」

「ハイ・・・」

「そして200年前のあの出来事で、シャイト以外の神獣は皆世界に散らばってしまった・・・」

しかも一人も此処に帰ってきておらん・・・恐らく記憶をなくした・・・

儂は記憶を取り戻し今長として此処にいる。だが他の連中がいつ目を醒ますかも分からない。」

「・・・」

「そして僕はここで天界を護らねばいかん・・・君に頼みたいのは・・・」

長は語気を強めて言った。

「シャイトと共に世界を回り、神獣達を探して此処へ誘導して欲しい！」

「・・・」

コートは戸惑った。

「神獣達が揃えば、200年前たった一人で此処を壊滅させた、大いなる存在をうち消す策が見いだせる。彼らを揃え、『トビラ』を開けば・・・」

「・・・」

コートは暫し黙った後聞く。

「何故オレの居場所が分かったのかと、オレの父に頼まなかった理由が知りたい」

「君の場所が分かったのは、シャイトが神獣であり、神獣には神獣族の居場所が微かに分かるようだからだ。」

シャイトが続ける。

「他に族の末裔が居たかも知れないが、君のは血が濃いのだろう・・・レベル的にはハーフやそこら・・・」

だからかなり居場所が特定できた。」

「だったら親父の方が血強いんじゃないか？何故親父じゃない」

「君の父に頼めない理由は・・・」

長は一瞬話をためらったが、決心したように言った。

「君の父が存在しないからだ・・・」

「・・・？」

コートは一瞬言葉の意味が分からなかった。

「存在しない・・・？」

「死んだと考えるのが自然じゃ・・・」

重苦しい口調で長が言った。

コートは当然落ち込んだ。

物心ついた頃から既に居らず、怒りさえ覚えていた父親。しかし親であることに変わりはない。

さっきよりもトーンの低い声でコートは聞く。

「じゃあ本当にオレしか……」

「ああ。」

「……世界崩壊の危機……信じがたいけどアンタ等の存在を認めた以上信じないわけには行かないか……」

決心したような物言い。少し笑顔らしきものが浮かんでいた。

「心配せんでも嘘ではない」

「……分かった。」

「オレにしか出来ないなら仕方ない……！その仕事引き受けるっ

！……」

力づく言った。

「頼もしい……」「全くじゃ」

笑顔でシャイトと長は言った。

この瞬間に、少年コートの冒険の幕は開いた……

第3話 決心（後書き）

ワーオ なんかシリアス！

冒険編入ったら絶対こんな暗くないです！

あと読んだら感想下さい！以上！

第4話 旅立ち、そして落下

「・・・話の流れから、記憶をなくした神獣を目覚めさせるには才
れが必要だと分かったが・・・」

コートはふと疑問に思ったことを口に出した。

「シャイトには神獣の位置も分からないし目覚めさせることも出来
ないのか？」

「・・・残念だけどどちらも出来ないみたいだ・・・」
シャイトはうなだれながら言った。

「先代から預かった文献にもそれは出来ないというような内容が書
かれていたのじゃ・・・」

「なんて不便なシステム・・・」

普通出来ないか？と思いつつも現状を認めたコートであった。

神界から一度戻ったコートは家に帰り、叔父に事情を話して行く準
備を整えた。

叔父は母方の叔父。そんな事情は知らなかったのでコートからそれ
を聞き、最初は疑ったが

シャイトを見るなり納得し、「気をつけるよ」と心配してくれたよ
うだ。

着替えや救急箱など長旅に必要な物を用意した。

お金は神界側が負担する。神界では殆どお金を使わないため、通貨
も下界と一緒だった。

素っ気ない返事をした叔父だったが、コートが家を出て、彼が振り
返ると涙を浮かべ手を振っていた。

コートは息を思い切り吸い、

「夕飯までには帰る！・・・いつの夕飯か分からないけど！」と、いつも外出時に言っていたセリフを変えて叫んだ。叔父は「おう！」と元気よく返した。

コートは再び神界へ戻った。まず長からお金が渡された。

「うほう！入ってるう！」

「・・・計画的に使うのじゃぞ」

次に残る神獣についての説明を受けた。

「光のシャイトと、空と地。炎。水に時、次元。さらに知性を司る者や、風の神獣。」

雷。そして生命と物質を司るもの。計12じゃ。」

「光・・・生命・・・知性・・・何だか神って感じたな・・・」

早速出発と言うときに、

「下界も200年前と変わっていないじゃろ。コレを持っていってくれ」

長はコートに一本の剣を差し出した。

「200年前の神獣族が残した魔剣じゃ。剣は扱えるか？練習した方が・・・」

「・・・運がよかった。オレ剣術は学んだことありますよ・・・」

「おお！そうか！」「運いいな！」

コートの叔父の息子・・・つまり彼の従兄弟は剣の先生で、暇なくよく教わっていた。

コートは一緒に貰ったベルトを巻き、剣を差し込んだ。

「よし・・・！」

「その剣は魔法の力を受けて強化される・・・神獣の力を開放し剣に纏わせれば強力な武器となるはずじゃ・・・」

程なくして本当の出発の時が来た。

長も椅子から立ち、宮殿を出て外で見送る。

長はシャイトに小さな袋を渡していた。

「これを空に投げればいいのか……？」

シャイトは長に袋の中身を見せて聞く。

それは魔力の籠もった石だった。

「うむ。天に投げれば魔力が君たちを天界へ誘う。ただし数は考え

て使うのじゃ……」

「うん」

続いてコートが口を開いた。

「一個だけ聞いておきたいんだけど……さっき呟いていた『トビ

ラ』とは……？」

「オレも知りたい！」

コートとシャイトの問いに長は戸惑った。

「人間界にも多少の情報があるはずだが……。あとシャイトは何

故知らぬ」

「しらんもんは知らない！」

「そんな噂あつたかな……」

開き直るシャイトと首を傾げるコートに長は、

「神獣全て呼んだ後のお楽しみにもしておこう……。はっはっは

と笑った。

「では頑張るのじゃ……！」

そう言つて長は、コートとシャイトを……蹴り飛ばした。

「!?」「長……!?」

「いつてらっしゃああああああい……！」

「うわああああああああああああああああ……！」

第4話 旅立ち、そして落下（後書き）

シリアス消えてひと安心ですね。

僕は重い雰囲気が好きじゃない！このテンションが好きです

第5話 読心男シン（前書き）

あらすじ

「ロット」にすむ少年コートはある日突然不思議な生き物と出会う。彼と共に神界を訪れ、自分が「神獣族」の末裔であったと知ったコートは、

神界の長に頼まれ、神獣達を搜索する旅に出た・・・

第5話 読心男シン

ラムルド大陸北東部 鉦山の町「ロット」周辺の平原

神獣の居場所のアテもなく、少年コートと神獣シャイトは暫し平原から一步も動かず話し合っていた。

15分ほど後、「神獣なんてそんなたいした存在が200年も地上に居れば、流石に何処かで噂されているだろう」

コートの一言で、二人はロットへ向けて歩き出した。

ロットに入るとすぐに案内役に声をかけられる。

「ようこそロット・・・へ・・・？アレ？コートか？旅は？」

叔父が町中に知らせたのだろうか・・・

コートはそんな事を考えながら、

「そうです。旅に出る前に聞きたいことがあって・・・」
と話す。

シャイトは彼の遙か上空でフワフワ浮いていた。

「俺でよけりやあ聞けよ」

「頼もしいです。」

コートは案内役の男に質問をした。

巨大モンスターとか、凄い竜とか、他の村でも良いからそんなものを見なかつたか、と。

案内役は村のことを詳しく知っているのは勿論、周辺の村の情報もある程度持っている。

それを知っていたコートは出来るだけたくさんの質問をしたが、

「しらねえなあ・・・それにしても何でそんなことを？」

と返してきた。

（叔父さんきつと何で町出たかは言わなかつたのだろうな・・・）

「単純に興味を持っただけです・・・お時間有り難う御座いました」

コートはこの村に一人歴史の研究者が居るのを知っていた。

「次はあの人に当たろう・・・」

コートは周辺の人々に彼の家の場所を聞いた。

家は図書館の中にある。人々は皆そう言った。

彼は図書館を所有している、と言っている人もいた。

親切な人から貰った地図を見ながら図書館へ向かうコート。

図書館の一番奥の部屋にノックをする。

「御免下さい・・・」

「入って。」

言われるがままコートはドアを開けた。

ギィと重々しい音を立ててドアは開いた。

奥には一人の男性が、何かを飲みながら椅子に座って書類を書いていた。

細長い顔に黒縁のメガネ。目は鋭く、睨み付けられたら思わず怯んでしまうだろう。

服装はスーツで、コートは紳士的な印象を受けた。

部屋にコーヒーの匂いが広がり、彼がすすっていたものの正体を物語った。

「初めまして神獣族のコート君。ワタシはシンという。考古学から最近の歴史まで何でも任せてください。

で、ワタシに何が聞きたいのだい？」

「・・・え、」

コートは名乗ってもいないし、先の案内人の反応を見る限り先祖の話は割れていない。

用の内容（質問をすること）も分かっているような口振り。

「君が探しているのは神獣のことだろうか？ワタシは幾つかそれらしい情報を持って居るぞ。」

それにしても君の近くで飛んでいるソレも神獣なのか。」

「・・・え、え。」

コートの顔は硬直していた。
まずシャイトはシンの見えない位置で飛んでいるし、ソレが神獣だと分かるわけがない。

「心を読めるのがそれほど珍しいか・・・。」
シンはしれつと凄じことを言った。

反応する余裕がないくらい驚いているコートに追い打ちとなる一言が飛んできた。

「・・・というかワタシ自身が神獣なのだが・・・。」

「・・・は？」

第5話 読心男シン（後書き）

今 気づいた

コート目線の方がやりやすいなコレ・・・w

このまま神様視点で頑張ってみることにしよう。
キツくなったら・・・うん・・・

第6話 敵現る！（前書き）

サブタイの話数ミスしたので訂正。

に伸びた。

それらのことをコート達に語った。

「……つまり範囲が及ばないから気づかなかったと……」

「うむ。長は『読心』は出来ないが、悪しきオーラのものに敏感だ……敏感肌だな」

「敏感肌って何だよ……」

コートはため息混じりに言った。

ここでシンも口を開く。

「ところで悪しき意志とは……？」

コートは内容まで彼に伝えていなかった。

「うっかりしていた……」

「大丈夫だ。内容を思い浮かべてくれ……」

「あ、そうか……」

数分後、二人の心を読み終えたシン。

「そのような大変な事態に……すぐにワタシもお供しよう。仲間
は多い方がいいだろう……」

「有り難う御座います。」「あんがとう……」

ため口で感謝したシャイトは続けて質問をした。

「子供だったからオレは覚えてないけど……人型の神獣なんて居
るの……？」

シンはくすつと笑い、

「化けているだけだ」

と答えた。

「さすがにあの姿じゃあふらつけないからな……。ワタシの魔力
は本来は読心等にしか使えないが、姿を眩ます程度なら別だ。

……しかし脳の造りは人と酷似して居るぞ。コート君感謝しろ。

ワタシの先祖の脳の造りが君たちに受け継がれているのだ……」

「あ……何か人が神などを除く生物として最も賢いって聞いた
ことあるような……」

「そうなのか・・・」
コートの眩きにシャイトが頷きながら言った。

「では行こ・・・!?!」

突如シンの表情が強ばった。

「どうしたんです!?!」

「・・・敵・・・!?!」

「敵イ!?!」

「しかも魔物・・・!」

世界には動物の他に、魔法を扱う『魔物』が存在する。

彼らも世界に多く生息するが、町にまで入ってくるとなるとかなり凶暴である。

高度な文明を誇り、数多くの武器を生み出す人間に敵うということだ。

「っていつか分かるって事は・・・」

おそろおそろコートが聞くと、

「10m以内だな」

とシンが答えた。

「でも図書館内なら職員が・・・!」

「なら外だ!!」

シンはカーテンを開け、窓の外を見た。

大きな二本角を持つ四足歩行。

動物の牛によく似ている姿だが、角はピンと真っ直ぐ前を向いており敵を突くのに向いている形だ。

「『ガルブ』か・・・」

こちらを向き、鼻息を荒くしながら体を揺らしている。

「あれは威嚇の姿勢・・・何の因果か知らないがワタシ達を襲う気らしい・・・」

「え！？」

「力、スタミナはかなりあるが、元気なとき身を守るとはしないに等しい。」

魔法も殆ど使わない。突進してきた後のスキを狙おう。」

「おお！」「すげえ！」

知の神獣にふさわしい冷静な考察に二人は思わず声を漏らす。

「じゃあ神獣サマ！いっちょ撃退を！」「うんうん！」

調子付いた二人がシンに言った。シンはニヤリと笑い、シャイトの頭に手をのせた。

「バトーンタアッチ！」

「ええええええええええええええええええええええ」

シンはとてつもなく戦いに向かないのだ。

攻撃するための魔力の使用方法が上手くつかめない。

完全に使い方の記憶が戻れば戦えるらしいが、今の彼には読心しか脳がない。

「くっそ！多分いける！シャイト！着いてきてくれ！！」

コートは剣を抜き、窓を開けて外へ飛び出た。

「ええええええ！待って！」

コートが外におりると、ガルブは首を彼に向けた。

狙いは彼らしい。

コートは呟く。

「レイドに教わったからだいじょーぶだ。落ち着けオレ・・・」

何かの発表会直前のように呟くコートに、シャイトが話しかける。

「オレあんま役たたねえぞ！まだ産まれて200年だし！」

「そんだけ生きてりゃ十分さ」

「人間で言う12歳だけど！？」

「ガルツ！」

話しているうちにガルブは突進を始めた。

「くっ！」「よっ！」

コートは横に、シャイトは浮いて避け、

「オラっ！」

右足で踏み込んで、勢い余って止まり切れていない減速中のガルブに向かつて太刀を浴びせた。

「ガルツ！」

「コンボオ！」

彼が従兄弟に教わった剣技を彼は実行する。

踏み置いた右足の右側に、剣を振った勢いに乗り左足を置く。

その状態から左足で跳ねながら振り向き、右足で着地。同時に体重の乗った一太刀がガルブに襲いかかる。

「ガアアア！！！」

「これぞレイド式ステップアップグラビティヘビー！」

「長くてダサッ！」

驚き顔で指摘するシャイト。

「ガルルルルル・・・」

流星のスタミナであり、倒れるどころか怒った表情でコートを見つめるガルブ。

「しぶといなあ・・・」

そんな様子を何も出来ないシンはコーヒをすすりながらみている。

「エスプレッソはワタシの嫁・・・」

第6話 敵現る！（後書き）

初戦闘。

これ大丈夫か！？

血とか書いてないから大丈夫だとは思っけど・・・

モンスター斬ったりするのはセーフ！？

第7話 神獣族の力！

図書館の窓の外。ここは図書館のいわゆる裏庭。

「くっ！」

ガルブは角を突きだし突進してきた。

「わっ！アブねっ！！」

近くの石につまづき危うく転びかけたコート。

「・・・鎧とかかっとう・・・」

転びかけたコートを見て、流石にシンは少し手を貸すことにした。

「こんな物役立つか知らないが使いー」

シンが放り投げたのは一つの石。

微かに青色の光を放っている。

ガルブに警戒しながら「・・・これは？」

と聞くコート。

「魔力が込められた特殊な石だ！タイプは色々ある！溜めたり一発だったり！とにかく使つと良い！」

そう言われたコートは石を握ったり叩いたりしたが何も起きない。

「上に向かって投げろ！」

「上？」

コートは上に向かって石を放り投げた。

・・・しかし何もおこらなかつた。

「溜める系統のだったんだ！ドンマイ！」

「ドンマイじゃねえええええ！！！！！！」

と、そこに放り投げた石に当たって落ちてきたシャイトが。

「痛て！なにすんだ全く！」

文句をスルーしてコートはシャイトに言う。

「流石のスタミナだ。見る・・・」

攻撃の体勢で待ちかまえるガルブだが、二度斬られて居るのに息一つ切らしていない。

「このままじゃ俺たちが先にやられる・・・」

「助け呼べばいいだろ！」

シャイトが声を張り上げた。

「そうする前に試したいことがある・・・」

そう言っつてコートはシャイトに耳打ちした。

「これで駄目だったら逃げよう。初めての戦いだし立ち向かわなければ意味がない！」

コートは良いセリフを言ったのだが、ドヤ顔気持ち悪いというシャイトの発言で台無しになった。

「頼んだぞ！」「ああ！」

シャイトはまだ使い慣れていない、自身の「光の魔力」を集め出した。

その間シャイトをまもるためコートは敵の気を引く。

「やーいやい来いよ二本角！あれねー？角じゃなくて髪の毛ですかあー？」

やーやーそれは済みませんねえお八ゲの牛さああん」

「ガルルルルッ！」

「逃げるおーっ！」

そのやり取りを見ていたシン。

「人間の優れた知性をまるで感じさせない罵倒の仕方だな・・・」
知の神獣らしい発言だった。

「OKだ！！」「おっしや！」

コートがガルブの6度目の突進を避けたときシャイトが言った。

「オレの血が一体どんな物なのか楽しみだ！！」

コートがシャイトに触れると、シャイトの周りで輝いていた何か

彼に移動する。

「なっ！？死ぬぞ！？」

シンは驚愕の表情。しかし。

「おおおおお！！！！」

自分の手を見て驚くコート。シャイトの光の力はコートに移動していた。

「あれほどの他人の魔力を纏いながら笑顔とは……やはり神獣族・
・ワタシは彼を見くびっていたようだ……」

直後、長から渡された『魔剣』が震え出す。

「！？ 何だ！？」

見る見るうちに魔剣は輝きを増し、コートの輝きが失われていく。

「魔力を吸ってるのか……」

シャイトが言った。

「凄いぞこの剣！」

コートも驚きの表情。

ガルブはその様子に少し警戒して戸惑っている。

コートは「そこで」剣を振るった。

光の刃が飛んでいき、ガルブを切り裂いた。

「ガルウウウウウ！！！！」

「「おおおお！！！！」」

歓喜の声を上げた二人。

強力な一発は、ガルブを一撃で倒れさせたのだった。

第8話 今度こそなよろならロット(前書き)

受験 W W W W W W W

忙しくて更新亀歩き化します。

見てくれている方がもし居たら済みません。
では8話です。

第8話 今度こそおまじゅうならロリット

「やるじゃないか・・・」

シンも目を丸くして言った。

「やったーやったー！」

無邪気にはしゃぐシャイト。

「オレの力か・・・？オレは本当にオレか・・・オレがとどめを・・・」

意味不明なことを呟くコート。

とどめを刺したのは剣と魔力である。

直接剣を当てたわけではない。

(・・・それにしても「飛ぶ」という魔力の性質を見破ったコート君が凄い・・・)

ぼそりとシンは呟いたが、喜ぶ二人の耳には届いていなかった。

ガルブはそのまま町の保安官達に気絶した状態で運ばれた。

「・・・さて。改めて宜しく、シン・・・さん」

「シンで良い。ワタシは上下関係などさほど気にしていない・・・」

「・・・宜しく、シン」

コート達は図書館を後にした。

「残りは10人だな・・・」

心を読んだらしいシンは言った。

「うん・・・能力で何とかならないの二人とも」

「無理だ。10m以内じゃないと」「10m以内でも無理」

シンが言い、続けてシャイトも言った。

「ふう・・・ちまちま探すしか無いか・・・」

するとシンが首を振り、

「・・・ワタシがココに行き着くまでの150年、幾つかそれらしい情報を手に入れたといっただろう」

「あー！」

数十分前、彼らが初めてあったときシンはそう言っていた。

「聞かせてくれよ」

シャイトの言葉にシンは頷き、話した。

「取り敢えず近くの村で聞いた話からだ。」

何でも『大地の民』なるものがあるらしい。それもこの近くだそう
だ」

「大地の民・・・地の神獣に関係ありそうだ・・・」

「知？ワタシが知の神獣だが？」

「知ってるよ！！！！地面の地だよ！」

「あ、ああー」

半分怒っているコートに悪びれもせず気の抜けた声を漏らすシンだった。

「知の神獣ならそのくらい分かれよ！」

「ごもつともだ・・・」

シンはしゅんとして言った。

「とにかく、ワタシがその話を聞いた村まで行こう・・・『大地の民』の居場所が分かるかも知れない」

「・・・今度こそロットとお別れか」

最初に出たときは皆に見送られて、町自体に対する愛着は湧かなか
ったが、

こうしてみると「町として」何だか名残惜しいと感じるコートだっ
た。

暫く歩き、町の門の前に辿り着いた。

「今度こそさようなら」

コートと、シンも同時に呟いて町の門を出た。

町の外には、町の鉾山の、鋼臭い空気とは離れた自然の香りを放つ、草原が広がっていた。

「もう2年くらい町でてねえや・・・」

「ワタシなんて15年だ」

「それ来てからずっとじゃなか！」

シャイトが突っ込んだ。

「それにしても綺麗だな・・・」

風が吹き抜け、草がなびく。

目を凝らすと数本の木が立っており、それもまた風に気持ちよさそうになびく。

花の一本こそないが、絵に描いたような美しい風景がそこに広がっていた。

「魔物らしきものも見あたらないな」

「シン、その町は何処に？」

「・・・よく見る、こんな広い草原だ。見える」

コートは遠くに見える木の根元に大きな建物を見た。

「あれか・・・」

目を細めながらコートが呟く。

「意外と近いな・・・」

シャイトが意外そうに言う。

「近くの町なんだから当たり前だが・・・」

シンが答えた。

「・・・取り敢えず向かおう。」

「ああ。」「うむ」

コート、シャイト、シンは早速その町へ向かう事にした。生まれ故郷、ロットで仲間を一人見つけたコート。

残る神獣は10。
彼らの旅はまだまだ続く。

第9話 大地の民（前書き）

明日は時間ないしー気に更新w

第9話 大地の民

コート達は草原の向こうに見える町に無事に着いた。10分ほど歩けばすぐ着いてしまい、道中魔物に会うこともなかった。

町に近づくに連れ、草原は終わり茶色い地面が姿を現して、岩も見られるようになった。

入り口付近に木は無く、木の根元にあるように見えたのはコートが距離に錯覚されただけだった。

町の名前はセカンス。

「昔来たことある気がするな……この町の外壁が何とも……」
町の建物は白いレンガの様なもので出来ていた。

中心部には、コートが遠くから確認したらしい大きな塔があった。

「あれは時計と鐘だな……」

シンが言った。

「昔ワタシは一度来ている。鐘は昼12時と夕方6時、明け方の6時に鳴る。」

深夜の12時には流石に鳴らなかったが、朝6時のは五月蠅かった。

……

シンが続けた。

「よし……早速聞いてみるか……情報」

コートはシンと離れた場所で人にたくさん話を聞く。

シンは人の集まる場所、市場の真ん中でぐるぐる歩きながら心を読む。

しかし大地の民の事を運良く考えている人間が居て、しかもその居場所を知っていると相当シビアである。

聞いた方が早いんじゃないかと思いつつ歩き回るシンだった。

ちなみにシャイトは容姿が竜で気味悪がられると言う理由で隔離された。

15分後。先ほどが丁度昼の12時前だったので、鐘が鳴ったら一度鐘の下に集合ということになった。

鐘が町に鳴り響く。鐘の下へ向かう3人。

「どうだった？」

まずはコートがシンに聞く。

「あの方法は効率が悪い。大地の民の事知っている奴はいたが、居場所までは・・・」

「直接捕まえて聞けよ！」

シャイトがもつともなことを言った。

「オレは一つだけ場所にまつわる情報もらえた。何か割と近くにあるらしいって言っていた」

「・・・『らしい』と言うレベルのなら、見つけらばいい場所に居ると考えるのが自然か・・・」

「もつと聞いてみよう」

今度は時計が30を指したら集合することになった。そして30分後。

「シン・・・この女の人何か知っているみたいだ」

「おお！・・・！！？」

コートは一人の女性を連れて歩いてきた。

驚くシンを見て、

「・・・何？」

もじもじしながら女性は言った。

10代後半辺りが妥当だろう。肌は白く、すべすべとしているのが見るだけで分かる。

目つきは鋭く、不敵な笑みを浮かべている。

シンは女性に「ちょっと待っていて」と言い、コートを連れ出した。

「なな、何だ？」

「聞けコート」

真剣な目でコートを見つめるシン。

「彼女の心が読めない・・・」

「！？神獣だろ！能力じゃないのか！？」

するとシンはため息をつき、

「能力が完全に戻っていないことの難点だ・・・『心を閉ざした人間』の精神領域にまでは安易に干渉出来ない」

シンは続ける。

「ただ一つだけ分かる。大地の民の事を知っているのは本当・・・」

「マジ！？」

取り敢えず本人に話を聞く。

「大地の民って何ですか？」

「そうだね・・・宗教みたいな感じ」

男の子っぽい口調で女性は言う。

「服装に特長とか、そんなのは？」

「あー・・・何かたまーに全身白いの居るけどアレなのかな・・・」

「

居場所とかは・・・？」

「・・・そこまではね。追いかけてもきえる」

「消える！？」

コート、シン、さらには上空で見ていたシャイトまでもが同時に驚いた。

「・・・仕組みとかは知らないよ」

話を聞き終わり、女性と別れようとしたその時、シンが突然口を開いた。

「『ギオス』とは一体何ですか？」

「ッ！？」

女性の顔に緊張が走る。

「何故それを！？何処で！？お前何者だあ！！！？」

「落ちついて。敵じゃない。『町』の人間じゃない。そもそもワタシはこの住人ではない」

「なにいつてんださっきから！？シン！？」

「・・・後で言う」

ぼそりとシンが言った。

「ここ人間じゃないなら・・・なおさら知っているのがおかしい。」

「

「ワタシに話を聞かせてくれたら、教えますよ」

「・・・分かった・・・その連れは？」

「ああ・・・彼らにも後で伝えても良いか」

「最後に決める」

女性が言った後、シンは「ちょっと待っていてくれ」

そう言い残して何処かへさっさといった。

「・・・ナンパ？」

「違いよ」

降りてきたシャイトにコートは言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2091z/>

神獣のトビラ

2011年12月15日01時46分発行